片貝新聞

発行所
片貝新聞社
〒947-01
小千谷市片貝町10367-4
TEL・FAX 0258-84-3246
編集発行人　吉原芳郎
題字　黒崎敬湶氏

JA片貝町
シンボルマーク
天の恵み地の恵み

佐藤邸購入へ更に前進
ふれあい公園として実現へ
市当局購入への手続きに動く

佐藤佐平治邸跡地を購入する問題は、9月19、20の両日に開かれた市議会一般質問で、小林光紀市議の質問に答える形で、小出弘市長が正式に都市公園として購入したい旨を明らかにして、町民にとって永年の懸案事項だっただけに、多数の片貝町民を喜ばした。（十月号詳報）

その後9月27日に市議会総務文教委員協議会が開かれ、小出市長も出席して「佐藤佐平治邸跡地を都市公園―ふれあい公園とするため購入したい」旨を語り、総務文教委員に意見を求めた。

総務文教委員は九名による構成であるが、その中に関広一市議、小林光紀市議、吉原正幸市議（記載は年齢順）の片貝町選出の市議が三名も名を連ねている。

小出市長が意見を求めたのに対し、小林光紀市議のみが「片貝町から公園施設というよりも、福祉施設に利用すべきとの陳情書が出ているが……。町民全員の意見を聞くべきではないか」との意見が出されたが、他の市議からそれに賛成する意見はなく、小林市議は総務文教委員長で司会進行の立場にもあるので、それ以上話しは発展せず、ほぼ全員一致で小出市長の進めようとするふれあい公園としての購入で良いという意見でまとまり、さらに一歩も二歩も前進したことになった。

市当局では所管の企画財政課と都市開発課が中心となり、購入のため県に申請等の手続きをとるべく作業を行なっている。

かたかい組も佐藤邸を考える
12月3日ひきずりそばで利用を検討か

地域活性化を目指す「かたかい組（松井均代表）は、機関誌「かわらばん　秋」をこのほど発行、その中で佐藤邸利用計画について、を載せている。

その内容は「前回のかわらばんで佐藤邸の利用方法について提案したが、市の〝ふれあい公園〟として整備という考えに決して反対ではない」ということをまず断わり、「あくまでも公園を活かした上で、活性化に役立つ方法を考えてゆこうというもの」と展開、具体的に「土産物店、そばや等の常設物産展、町の歴史・文化資料館、片貝町観光協の設置等」をあげながら問題提起している。結びに「容易なことではないが、実現に向け企画・立案の役割を担って行く」と決意を語っている。

また別のコーナーでは、「佐藤邸を借りる事が出来たら、12月3日(日)に佐藤邸を会場に「ひきずりそば」を食べながら佐藤邸のことを話し合いたい。その時は佐藤佐平治翁とゆかりの津南町結東地区の人達も招待したい」と載せている。

懐しい巫子爺で敬老
参加者感激！喜びの声届く

片貝町協議会主催の敬老会が1日、片貝小学校で開催された。当日は、晴天に恵まれたためか、出足も良く例年よりも多くのお年寄りが参加。対象者は843名で喜寿の43名が小千谷市長より表彰を受けた。

代表の京屋店主の佐藤敬一さんが、「戦争という困難を乗り越、今、こうして豊かな時代に生かされている事に感謝している」と御礼の言葉を述べた。

アトラクションでは、保育園児の遊戯に目を細め、町民の芸能に拍手を送っていた。最後に伝統芸能保存会が準備した30数年振りの「めっこんじさ」が姿を現わすと、くい入る様に見つめ懐かしさに、目頭を熱くするお年寄りもおり、「懐しい」の声があちこちから聞こえていた。

主張

期待したい　まつり反省会

二十三万人の人出とマスコミを賑わした秋祭りの喧騒もすっかり消え、ほんとにあれだけの人出があったのかと疑われるほど、町はひっそりとしたいつもの平静さをとり戻している。

今年の秋まつりについては前号でも触れたが、実に多くの教訓を町民に残してくれた。伝統に根づいた多くの催もあったが、新に加わったものもあった。その一つは「まつり反省会」であろう。

以前から多くの人達から、まつり後反省会を開いて来年の指針にしたらという意見はあったものの、なかなか実行されずにいたが、本年はじめて実現した。もっとも、まつり実行者の若い人達や各学年の出席がなかったのは片手落のきらいがないでもないが、曲りなりにもこの会がもたれたことは、シャトルバスの運行とともに賞賛に値すべきことと思う。

席上問題になったという実行委員会の設置について社務側から、来年のまつり迄にこの組織について何とかしたいという意志表示があったようで、大いに期待し見守って行きたいと思う。

たしかに今迄のように各自だけの実行委員会では、これだけ大規模になったまつりを運営して行くのには所詮無理な話で、小千谷市も観光の目玉として片貝まつりを謳っている以上、まったく責任がないとはいえない。もっとも片貝自体から市当局に何らの働きかけがない現状では、行政側が動きづらいことも理解できる。とかく「人のまつりに口を出すな」といった片貝人の気質があったことも否定できない。この際そうした今迄のしがらみを捨て、どのような組織体制がベターなのか早急に検討して、行政側も含め町全体の力を網羅した形の実行委員会を組織する必要があろう。これこそ開かれたまつりであり、今迄問題とされていた種々の問題も解決されるものと思う。次に成人いじめの問題は、事あるごとに叫ばれてるのに何らの解決も見い出せないのはどうしたことか、学校のいじめ問題と同じく悪いことと知りながら改められないとしたら、片貝の将来はどうなるのだろう。これは若い人の問題なのだから彼等が先頭に立って行動を起すことを期待したい。

警察からの要望で、雑踏の中へ玉送りの山車が割りこむのは危険だという指摘もあったと聞く。

元来片貝まつりは花火まつりと称され、これに付随した玉送り行事は主要な役割を占めている。危険の一語で取止めることもできまいが、どうした方法が良いのか大きな課題を与えられた。

さらにシャトルバスの運行については、概ね好評だったものの長岡方面からの車をどこに駐車させるか、終ってからの混乱の解決等問題はいくらでもあるが、何事も一挙に解決というわけにはゆくまい。

幸いにも今年はこうしたまつり反省会がもたれたことで、一歩一歩前進して行くきっかけができた。今後まつりがどう変って行くか期待したい。

かたかい春秋

山裾まで紅葉前線が下りて来た。深まりゆく秋の中、妙に感傷的な気分になれる時節でもあり、燈火親しむ候、なんとなくそのような気分になれる時節ではある。先月は体育の日があるせいか〝動〟のイメージがあるが、今月11月は文化の日があるだけでなく、落着き物静かで、何となく物思いにふけるようなイメージを抱くのは小欄だけであろうか。▼燈火親しむ候に、因んで、片貝町民であれば読んで損のない、否、是非とも一読すべき一冊を紹介したい。福原滋著「目明きを救った盲人　米山検校」（新潟日報事業社）だ。米山検校は、越後出身、江戸幕府の最終盤をとりしきった勝海舟の曾祖父である。盲目でありながら大名並みの格式の検校にまで駆け上った米山検校は、子供の頃―佐藤佐平治家のお婆様に目をかけてもらい、逆に按摩の弟子入り先である片貝の座頭組頭正の一のところでいじめられ、泥棒のぬれ衣を着せられた時、お婆様の言葉により一念発起、江戸へ出て修行をして大成したのである。▼佐藤佐平治家跡を市が購入して、都市公園とすることがほぼ本決まりとなった由、佐藤家が直接的、間接的に世に影響を及ぼしていたことを知るのも、後世の地元民として意義深いことと考える。▼かたかい組が佐藤邸を借りられれば、12月3日(日)に「ひきずりそば」を食べながら、利用方法を話し合う会を計画中とのこと。ユニークでおもしろい。若手グループが先頭に立って動く姿はたのもしい。成功を祈る。

町民駅伝大会
11月12日10時スタート

第16回片貝町民駅伝大会（片貝町体育協会、片貝中学校同窓会、片貝公民館主催、片貝町農協後援）は、11月12日午前10時から片貝小学校グラウンド発着で開催される。今年は下水道工事の影響で若干コースが変更となり0.5km増え、五区間12.5kmコースでの開催となる。毎年小学生チームから社会人チームまで多彩なチームが参加、ユニークな駅伝が繰り広げられている。

コースは一区―片貝小グラウンド～農協鴻巣支所前2.9km、二区―～山屋バス回転場付近2.1km、三区―～農協スタンド前2.5km、四区―～安達工務店前2.5km、五区―～片貝小グラウンド2.5km。

総合文化展
11月2、3の両日片貝ふるさと会館で

第16回片貝総合文化展（片貝公民館主催は、11月2日と3日の両日ふるさと会館で開催される。

片貝美術協会（藤塚健三郎代表）による美術展―絵画、書、工芸等。片貝菊花会（三重堀正三代表）による菊花展―懸崖、鉢物、福助等。片貝さつき・盆栽会（本田一郎代表）による盆栽展。片貝写真クラブ（佐藤誠代表）による写真展―人物、風景等。生け花の会（吉原昭子代表）による生け花展。ヤヨイ大学水墨画部（五十嵐常雄代表）による水墨画。同大学書道部（相崎勇吉代表）による書道など多彩。

町民運動会盛大
優勝は二ノ町チーム

第49回片貝町町民大運動会が8日片貝小学校グラウンドで開催された。山屋町が人員不足のため数年前から不出場となっており参加は8チーム。昨年の総合優勝三ノ町チームの代表芝久典君の宣誓で大会の幕開け。例年になく各チームとも応援席の人数も多く、大なべに肉汁を作るチーム、綿あめをサービスするチームとそれぞれ様々な趣向をこらし大会を盛り上げていた。

結果は、総合優勝―二ノ町チーム。準優勝―五ノ町・八島チーム。三位―町裏チーム。

なお、来年は記念すべき第50回大会となることもあり、今後一層同大会を盛り上げて行くためにも選手集めに困難な種目を改善して行く事や、もっと若者達にも参加してもらう手段を考えて行く必要があるのではないかとの要望も多い。

今年最後野球
平成ポパイが今年度のチャンプ

片貝町野球連盟（太刀川忠雄会長）主催の今年最後の大会、第七回片貝野球連盟選手権大会が、体育の日の10月10日に片貝町スポーツ広場で開催され、平成ポパイが初優勝し、今年度のトップの座についた。

この大会は今年の同野球連盟主催大会の各優勝チームが参加してのチャンピオンカーニバル。五チームが熱戦を展開した。

〈第1試合〉
トナカイ2―1ライオンズ
〈第二試合〉
プロテイン7―1ロイヤル
〈第三試合〉
平成ポパイ6―0トナカイ
〈決勝戦〉
平成ポパイ2―1プロテイン

協議会長の動き

9/29 片貝まつり反省会
町民運動会役員打合せ会
9/30 敬老会準備
10/1 片貝町敬老会
10/2 片貝バイパスの促進について市建設課と県小千谷土木事務所へ
10/7 町民運動会準備
10/8 第49回片貝町民大運動会
10/11 片貝バイパス説明会
10/14～10/20 第6回片貝中学校同窓祭
10/19～10/20 住み郷視察研修（高山市）
10/23 市公害対策審議会
10/25 住み郷魚沼ブロック研修会

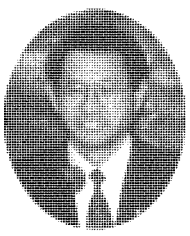
第6回片貝中同窓祭

元冬季五輪の久保田氏の記念講演

パーティーもなごやかに開催さる

第六回片回中学校同窓祭が、10月14日午後6時から片貝町農協の三階大ホールで開催された。毎回持ち回りで実行委員会を組織して運営しているが、今回は第18回卒の永遠会（藤沢貞夫会長―実行委員長、180名）と第30回卒のみつわ会（安達文隆会長、87名）が担当し、各学年から数名ずつが参加、総勢120名が参集して賑やかに繰り広げられた。

藤沢実行委員長が「年代を超えて年一回一堂に会するこの同窓祭が、母校の発展につながるよう期待している」、名塚孝一同窓会長が「同窓祭が各クラスの繁栄につながるよう願っている」と語り、来賓を代表し吉井陽協議会長が「同窓会は母校のみならず、片貝町にとっても大きな財産」と祝辞を述べた。

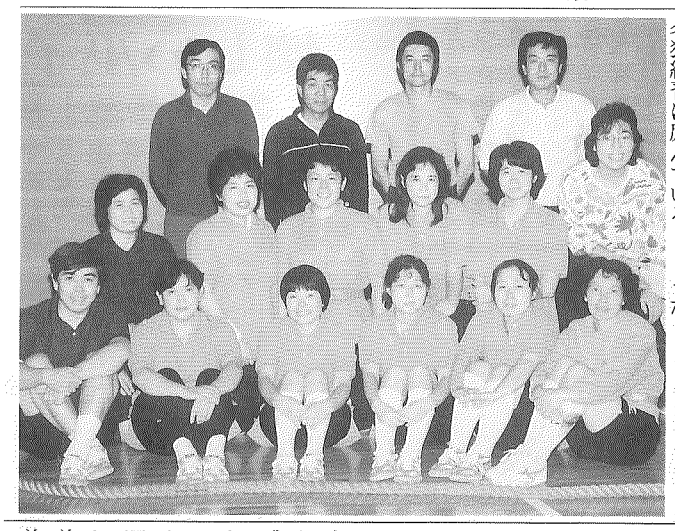


続いて冬季オリンピック複合で二季連続出場の久保田三知男氏（市社会体育課係長）による記念講演「我がスキー人生」が行なわれた。久保田氏は『色々な人に助けられてここまで来た。谷高定時制の時、増川忠教諭（後に谷高校長、故人）に出会ったことがスキー人生の始まりだった。スキー部員は自分一人であったが、斜面作りや様々な指導を行なってくれた。大学生の時国体直前に転倒してケガ、左手が動かなくなったが、痛み止めの注射を打って複合で優勝出来た。人生を変えたのは大学4年生の時。キャプテンになり言葉でなく態度で示そう、と一日五回練習を一人で黙々とこなし、後輩に〝頭がおかしくなったのでは〟と言われた程。この猛練習が効を奏しインカレ7位、国体で優勝し〝ひょっとすればオリンピックに出れるかな、出たい〟という気持になった。教授の力添えで一流企業に就職が決まっていたが、正直な気持を教授に話すと〝スキーを続けなさい。就職取り消しは何とかする〟と言ってくれた。ナショナルチームに入ると、実力の差にガク然としたが、練習終了後ひとりで抜け出し、他人より多く練習し、その練習量を日誌に記し自分の糧にした。その結果オリンピック連続出場となった。片貝は地域をあげての盛り上がりがあるので、近い将来、オリンピック選手が出るのでは。現在私の夢はオリンピックでジャンプの審査員を務めること』と語った。

その後のパーティも和気アイアイの中行なわれた。

県大会へ向け猛練習

綱引きの四尺玉クィーンズ



8月20日第10回JA片貝町綱引大会（片貝町農協主催）での優勝チーム二ノ町・茶畑チームが11月26日の県大会に向け、チーム名も「四尺玉クィーンズ」と改名猛練習に励んでいる。

同チームは10年前から行なわれている綱引き大会時に結成され、以来大会事前の数回のみの練習で試合に臨んでいたが、これまでは特にめざましい成績はなかった。

しかし今回は最後の大会（JA片貝町は今年で中止を打ち出している）という事もあり全員の気合いが掛かり、6月頃から熱心に練習を積んで来た。そのかいあって今大会ではみごと優勝し、県大会への出場権を獲得した。その後も思っても見なかった県大会に向けて片中体育館で汗を流している。練習日は男子優勝チームに合わせ週2回（火曜・木曜）の8時～10時まで。前半は、ストレッチ体操や体力作り。後半は男子チームの指導を受けながら綱引きの練習をしている。

メンバーの一人は、「チームの団結力は素晴らしく、又このスポーツはやればやる程奥が深い事を知りその魅力も見えて来た事がうれしい。又男子チームの人達が快く指導してくれたり、ベルトを貸してくれたりしてくれる事にとても感謝している」と語ってくれた。

メンバーは以下の通り、小宮陽子、吉井幸子、小野塚貴子、藤塚範子、舎川よし子、佐藤あゆみ、太刀川美由喜、佐藤浩子、安達由美子、藤塚千恵子。

グリーンパーク水沢

壮大なる計画へまた一歩

ブナの苗木200本を植える

グリーンパーク水沢（GPM）の一行十七名が、15日かねてから計画していたブナの苗木200本を水沢地内に植樹した。

グリーンパーク水沢は、五之町クラブから500m程山に入った場所「水沢」を整備して緑豊かな地にしようと遠大な計画を、現実に向けコツコツと努力するグループ（八月号で詳報）。

これまでの荒地を草刈り、U字溝整備等の〝開拓〟に取り組み、ミズバショウを少しずつ増やすなど地道な活動が徐々に進みつつある。

その中でもブナの苗木の植樹は大きな目標のひとつであった。会員は三十名であるが、当日は十七名が朝八時から作業を開始、雑木を刈り取り、高さ70cmから90cmの六年もののブナの苗木を一本一本ていねいに植樹した。作業は正午前に終了、自然の中で恒例の〝反省会〟は、キノコ汁で乾杯！今後の活動方針を語り合い、かって山の湯があった場所に山小屋を建て自然を楽しむ憩の場にしよう、などの提案も出された。

集めま～す

5日今年最後のリサイクル活動

リサイクルかたかいは、今年度最後のリサイクル作業を11月5日(日)午前9時～9時半まで、片貝支所前で開催する。回収する品目は新聞紙、雑誌、ダンボール、空缶（スチール、アルミ）、発泡スチロール、布類、乾電池など。なおびん類や埋め立てゴミなどの混入は作業する人達にとって手間が掛かるばかりでなく、非常に危険なので、キチンと分別し、出して欲しいとの事。

64億円、15年の大事業

県営圃場整備竣工す

総工費実に六億四千三百万円の信濃川左岸南部地区県営圃場（ほじょう）整備事業がこのほど完成、10月26日午前10時から岩野で記念碑除幕式が挙行された。

式典主催の信濃川岸土地改良区信濃川南部地区圃場整備協議会は、片貝地区圃場整備協議会（佐藤仁会長―JA片貝町組合長）と越路地区圃場整備協議会で組織されている。

圃場整備された面積は約547ha、うち片貝地区は約300ha。昭和五十四年に基礎調査採択、五十六年度工事着工となり十五年の歳月をかけてこのほど完成となった。

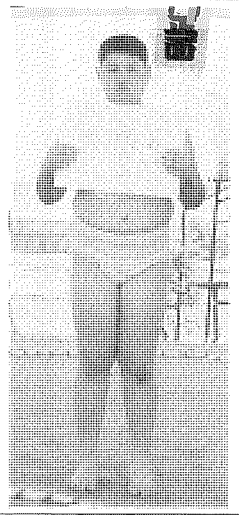
以前は腰までぬかる湿田であったが、客土してこれを解消。須川と焼田川を改修。魚沼線廃止に伴なう県道（片貝バイパス）の軌道敷確保、そして用水路、幹線農道、枝線農道を完備した。

総工費約六億四千三百万円のうち受益者（八百四十三戸）負担は8.24%。他は国、県、自治体が補助金及び負担金を支出、小千谷市は一千五百万円余りの負担金と補助金の合計となっている。

なお除幕式に続いて越路町町民体育館で竣工式典が行なわれた。

勇樹君ベスト8入り！

全国少年相撲大会出場へ



県下では敵なしの安部勇樹君（11才片小5年）が8日東京都立川市の練成館で行なわれた「第12回全国少年相撲大会」（立川市など主催）に出場し、念願のベスト8入りを果たした。

去る7月30日東京の国技館で行なわれたわんぱく相撲全国大会では、第一回戦に優勝候補との取り組みとなり本人期する所のベスト8入りを果たせなかった。

今大会ではその時の悔しさをバネに一念発起。父親の久さんと共に、相撲が栄んな十日町市まで約45分の道程をかけ、毎週2回（水曜・金曜）午後7時～9時までの練習で技に磨きをかけて来た。

その気力のせいか、夏場166cm85kgだった勇樹君だが現在は168cm91kgと一回り成長。一段とたくましい体つきになっている。

大会当日は雨天のため非常に寒く、取り組みは夕方という悪条件の中、持ち前の張張りで四回戦まで順調に勝ち進み、得意技の寄り切りで今回の好成績を獲得。準々決勝では、今大会準優勝の名古屋の小学生との対戦で惜しくも敗れベスト4を逃した。小千谷市からは他に2名の小学生も参加したが残念ながら入賞は果せなかった。

なお12月10日(日)国技館で開催される世界相撲選手権大会のアトラクションとして全日本小学生相撲優勝大会が行なわれ全国から20名の有力選手が招待される事になっているが、勇樹君もその一人として出場が決まっている。

番外

片貝ヒューマンウォッチング

インドネシアから五十嵐家へ

鴻ノ巣の五十嵐正弘さん愛子さん夫妻は、華麗なゆり・カサブランカを中心に稲作・カリフラワーなどを栽培している農業経営者で、7年前から㈱新潟県国際農業交流協会のアセアン農業研究生受入事業に協力し、タイやインドネシアからの研修生を受け入れている。

正弘さんも、かつてアメリカ・カリフォルニアでの海外研修の経験があり、自らも受け入れをしてみたいと思いこの事業に参加する事となった。

研修生は、毎年4月～11月までの8ケ月間五十嵐さんの家族と生活を共にし農業の勉強をしている。

今年はインドネシアのアロム・アタマジャさん（28才）が訪れているが、地域の会合などにも一緒に参加してもらい少しでも多くの日本を知ってもらうようにしているという。「片貝町民運動会ではうなぎつかみレースや綱引きなどに参加し、とても楽しかった」とアロムさんが日本語で答えてくれた。

10月19日には、インドネシア大使館、農業水産部長一行がインドネシア政府からの感謝状と記念品を持って研修生激励をかね五十嵐家を訪問。

「多くの研修生を受け入れて下さって本当に感謝しています。皆さんのおかげで我国も日本のようなプログラムを組みアフリカからの研修生を受け入れています」と農業大臣からの感謝の言葉を伝えた。それに答え正弘さんも「我々もこうして日本に来て下さる人や、又来たくても来れなかった人達に深く感謝しています。」と述べた。又愛子さんからは、「文化の交流の原点は食べることにあると思うので研修生に1つでも良いので国の料理を覚えて来てもらい披露して頂けるととてもうれしい」との要望が出された。

正弘さんのここ数年来の楽しみは農閑期の3～4週間をかけ、研修生の国を尋ねたり、花の勉強をかね、いろいろな国を回ることだという。又愛子さんは新潟県農村地域アドバイザーなど幅広く活躍している。（写真―インドネシア大使館、農業水産部長一行が来た時の記念写真、右から二人目と三人目が五十嵐さん夫妻、四人目がアロムさん）